



「精神疾患における認知機能障害の矯正法」臨床家マニュアル 第2版

アリス・メダリア, ティファニー・ハーランズ, アリス・サパーズタイン, ナディン・レヴハイム 著

中込和幸 監修
橋本直樹, 池澤 聰, 最上多美子, 豊巻敦人 監訳
森元隆文, 井上貴雄, 國田幸治 訳

星和書店
2019年12月 196頁
本体価格 3,600円+税

本書は、コンピュータゲームを使ったリハビリ志向の認知矯正療法の1つである Neuropsychological Educational Approach to Remediation (NEAR) の臨床実践マニュアルの、2018年に出版された第2版の訳書である。ここでの認知とは、注意、記憶、抽象化、処理速度などの機能を指す。基本的な治療原理や治療プログラムの構造は2009年の初版から引き継がれているが、初版出版後、テクノロジーの大幅な進歩や、わが国の多施設共同研究をはじめ多くの国での治療経験の積み重ねがあり、第2版ではコンピュータセッションで使用するソフトウェアについての説明や、エビデンスの増強に大幅な改訂がなされている。また、本書では日本語版の初版には収録されなかった「橋渡し（ブリッジング）グループ」という、認知機能の変化に伴って、徐々に適応的な行動の変化を促進するための言語グループの運営についても、多くの例を挙げて詳細に説明されている。

前世紀初頭に Bleuler が認知機能障害を統合失調症の基本症状として取り上げたように、多くの精神疾患に日常生活機能やリハビリを妨げる認知機能障害が併存することは古くから知られてきた。しかし、幻覚や妄想などの精神症状よりも認知機能障害のほうが社会生活機能の障害に大きな影響をもたらすことが報告され、認知機能の改善を目

的にした治療が注目されるようになったのは、この20～30年のことである。認知機能の障害がさまざまな情緒や行動上の問題に影響し、その改善が重要であることは、発達障害などの幼少時期から特性が顕在化する障害に関してもあてはまり、最近では一般にも少しずつ認識が広まりつつある。そして、認知機能の改善のためには、情緒や動機づけ、低次の感覚情報処理の問題など、個々の患者のさまざまな側面への配慮が必要となる。

NEAR は内発的動機づけを重視し、コンピュータセッションと言語セッションを用いて参加者の認知機能を高め、自立を促す治療法である。本書の前半では、精神疾患当事者の認知機能障害とその影響、認知矯正療法の治療効果に関するエビデンスについて、神経心理学、学習理論、教育心理学、リハビリテーション心理学、自己決定理論、来談者中心理論などを用いて、NEAR の理論的背景について説明されている。後半では、認知機能訓練やグループディスカッションのトピックの選択、参加者の募集、インテークと評価の実行、治療計画の作成、困難な状況への対処など、個々の参加者のアセスメントを十分にを行い、参加者のニーズに沿った個別化された治療を実践するための方法が解説されている。また、NEAR を臨床で実践するために必要な資料や配付物なども本書に含まれている。

監修者らが原著者の一人であるアリス・メダリア教授を2006年に日本に招聘して以後、わが国でも NEAR のトレーニングワークショップが継続的に開催され、北海道から沖縄まで多くの施設で実践されている。原著者らは、長く精神リハビリテーションや医療心理学にかかわり、精神科領域に認知的健康 (cognitive health) の概念を導入し、認知機能を改善する治療法の認知矯正療法の実証的研究や実践、普及にかかわってきた。今後わが国でも、このような認知機能の改善のための治療法が普及し、バリエーションがさらに増え適応が拡大し、多くの精神疾患当事者の社会生活の困難さに改善がもたらされると幸いである。

(高橋秀俊)